

2023 全日本ARDF競技大会 (第31回大会)宮城県で開催!



2023年10月22日
(白石市および蔵王町)

「全日本ARDF競技大会」が、令和5年10月22日(日)に、宮城県白石市の花山青少年自然の家南蔵王野営場を中心とした地域でおこなわれました。



▲スタート時の蔵王連峰の紅葉

はじめに

本大会は本来2020年に開催予定でしたが、世界的に猛威を振るった新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大により、やむなく3年連続での延期を繰り返し今年に至ったところです。2023年に入り感染症法上の位置づけが5類感染症となつてから、ようやく全国のARDF愛好家の皆さまへ開催案内をおこなうことができるようになりました。

東北における「全日本ARDF競技大会」は、2003年開催の秋田県北秋田郡森吉町以来20年ぶりの開催であり、開催地である宮城県をはじめ東北6県においては、大会運営の経験者が少ない中、JARLのARDF委員会をはじめ、秋田県支部、新潟県支部、北海道地方本部の皆さまのご協力を得ながら、準備を重ねてまいりました。

コロナ禍の最中は関係者が集まるとの本格的な準備ができず、新潟県支部および北海道地方本部からこれまでの開催状況に関わる資料の提供を受け、基礎知識の習得とともに大会開催に欠かせない競技用地図ソフトの入手や使用方法の習得に努めました。経験がない中では、なかなか効果が上がらない状況が続きました。2023年に入ってからは、コロナ禍に改善傾向が見られるはじめたため、東北6県支部長の理解を得ながら、大会運営に関する準備を本格化させることができました。そこで、同年1月29日に2023全日本ARDF競技大会実行委員会を立ち上げ、ARDF審判員が不足していることから、2回のARDF審判員講習会(1月22日・4月23日)を開催しました。さらに大会開催準備のための競技会場実査やオンライン会議を繰り返した中で、実際の大会運営状況を体験すべきとのこと

でしたので、秋田県支部の協力のもと、秋田県内の無線部のOB・OGが集結し毎年大会を開催している「2023あきたこまち杯ARDF競技大会」視察(8月6日)をおこない、準備を進めました。この大会準備においては、コロナ禍で一気に普及が広がったオンライン会議というツールが多くメンバーと共同作業をおこなう大会準備に大いに役立ちました。

大会前日

今大会に参加した審判・運営委員は、東北6県から集まった70人を超えるメンバーから構成されていることから、これまで事前調査などに参加できず競技会場も初めてというメンバーも多かったため、大会前日の顔合わせ、担当業務の説明、会場の実地確認が大変重要でした。そしてTX担当は、



▲TX班の打合せ



▲受付で渡す資料の袋詰め

TX設置用の杭打ちやTX機器操作の勉強会を午前中から実施しました。その他の班については午後から集合し、大会本部の設置、各種看板の設置、受付で配付する資料の袋詰めなどをおこない、翌日の大会へ備えました。

開会式

開会式と閉会式の司会は、青森県支部の各種イベントでも経験豊富なJG7WEN、JL7POCの太田昭男・ひろ子夫妻の進行でおこなわれ、息の合った司会に参加選手の皆さんから「台本もしっかり作ってあり良かった」と感想がありました。



▲司会のJG7WEN(左)、JL7POC

開会式は、JA7AJH尾形和俊大会実行委員長の開会宣言の後、JA5SUD森田耕司大会会長の挨拶に続き、JR1IJC杉本仁JAIA事務局長からご祝辞をいただきました。さら



▲尾形大会実行委員長開会宣言

に、2019年優勝の関東地方本部からのJAIA杯の返還、選手宣誓と続きました。東北での開催ということから、秋田県立能代高等学校の保坂恒さんと小野夢空さんによる元気溢れる堂々した選手宣言がおこなわれ、会場の皆さんからは大きな拍手がありました。その後、JN7AEL藤原浩樹審判長から競技説明と諸注意があり、前日の雨で競技会場が大変滑り易くなっているため十分注意するよう注意がありました。尾形大会実行委員長からの事務連絡ののち、スタートの準備となりました。



▲関東地方本部からのJAIA杯返還



▲選手宣誓の能代高校のお二方

競技地域の「南蔵王野営場」は、ARDF競技で多く使用されている八木・宇田アンテナの発祥の地である宮城県・西南部の蔵王国立公園内に位置し、登山口にもほど近く、自然の美しさや厳しさを満喫できる広大な施設であり、大会開催にうってつけの会場です。ところが、平成23年3月の東日本大震災の翌年に5つあるキャンプサイトの内3つが閉鎖となり、さらにその後の豪雨災害の影響などにより施設の一部が痛み、競技会場の中に多くの立ち入り禁止区域を設けることになり、競技用地図のかなりのスペースを立ち入り禁止区域で占めるようになってしまいました。

クラシック競技(144MHz)

大会当日の10月22日(日)の天候は、それまで暖かい日が続いていたのと打って変わって、宮城と山形両県にまたがる蔵王連峰で初冠雪が平年より6日早く観測したと仙台管区气象台から発表がありました。会場奥・蔵王連峰では、紅葉と初冠雪という素晴らしい景色が広がり、会場においては朝にひどく冷え込んだにも関わらず、100名近くの参加選手が元気にスタートしました。スタート地点の山乃小屋チャーターから南蔵王野営場への走路は、距離が約1.5kmあり標高差約90mという厳しい坂道から始まりまし



▲第1組スタート!

この途中にサービス問題のTX1を設置しましたが、後ろに控える標高の高い所へ設置のTX2やビーコンの電波などに引っ張られ見過ごした選手も一部いたようです。

TX3は、車道沿いで走りやすいコースの中で一番標高の高い地点へ設定しました。スタート地点から走ってくると、走りやすい道路ではありますが標高差が200m近くとなりますので、体力的に厳しいところでした。

TX4については、当初は水芭蕉の森のあずまや付近に設定したところ、経験が浅い学生さんたちには厳しすぎるとの意見から、総走行距離が5kmを満たさないようTXの配置を変更し、だいぶ手前の沢にかかる橋近くに設定を変更しました。会場の地形の関係から水芭蕉の森付近と思われた方もいたようでした。

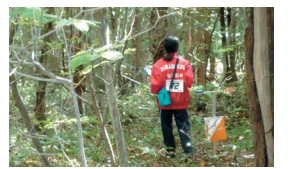
TX5もサービス問題として設定しましたが、会場の地形の関係から、位置の特定が難しい選手もいたようでした。

今回設定した中においてTX2が一番の難所であり、スタート地点からぎりぎり200mの標高差というところに、一旦、沢まで下り、再び約80mを一気に登るといった厳しいコースとなっており、標高も一番高いためTX2の電波が強力に競技会場全域に届き、距離的に近いのではと思われた方もいらしたのではと思っています。

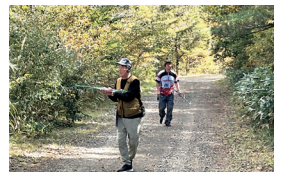
主催者側は5つのTXを回ると1時間30分は超えると想定していましたが、選手の皆さまの競技結果によると、日頃の体力錬成や過去の経験の積み重ねなどから1時間30分を切る選手が複数いました。これは日々の努力の積み重ねの結果と推察されます。選手の多



▲TX1 通り過ぎる方もいた



▲TX2 付近 一番の難所である



▲TX3 体力が削られる厳しい標高差



▲TX4 付近の険しい坂道を駆け上がる選手



▲TX5 意外と難しかった



▲ゴールへ向け疾走する選手

くは、競技時間制限の2時間近くかかったところですが、スタートした選手全員がゴールすることができたことは、主催者側として大変嬉しいことでした。

アマチュア無線の体験運用

大会本部のある第2キャンプセンターにJA7RLを設置し、競技後の昼食時間を利用して、大会参加の選手の皆さん(中学生2名、高校生2名、これまでに運用経験がない第四級アマチュア無線技士の高校生1名)による体験運用を、430MHz帯を用いておこないました。JA7SOK渡辺和弘秋田県支部長とJA7UQB佐藤雄孝宮城県支部長が丁寧な事前説明とサポートをおこない、短い時間ではありましたが、アマチュア無線の楽しさを感じていただきました。



▲体験運用を実施

閉会式・表彰式

表彰式は、早めに選手の皆さんへ帰っていただくためと、開催まで会場付近での熊被害情報はありませんでした。全国的な熊被害の増加を受けて熊被害の確率が高くなる日暮れ前に間に合うように、案内よりも早めにスケジュールを進めるよう調整していました。しかし、集計作業をおこなう中で、TX通過記録の確認依頼への対応や、表彰状の印刷・押印に手間取ったことから、早めたはずのスケジュールが後へ移り、当日考えていたスケジュールよりも大分遅れたものの、なんとか当初に皆さまへ案内していたスケジュールよりも早めに進めることができました。



▲森田大会会長の挨拶

◎競技部門ごとの表彰

表彰は競技部門ごとにおこなわれ、森田大会会長から被表彰者一人一人へ表彰状とメダルが授与され、表彰された選手の皆さんは笑顔で記念写真の声に応えていました。



▲表彰式

◎144MHz帯団体賞の地方本部対抗表彰(JAIA賞)

JAIA賞は、JR1IJC杉本仁JAIA事務局長からトロフィーが授与され「関東地方本部」が5連覇を成し遂げられました。(写真：右段上)

◎中学校および高等学校対抗表彰(JARD賞)

JARD賞は、JH1OPI伊藤純JARD事務局長からトロフィーが授与され、会場の皆さまからの声援へ笑顔で応えていました。



▲地方本部対抗では関東が5連覇



▲中学校対抗部門表彰



▲高等学校対抗部門表彰

◎閉会式

閉会式は、JN7AEL藤原浩樹審判長からの講評があり、最後に森田大会会長の挨拶により締めくくられました。



▲審判長講評

おわりに

東北での今大会の開催は、2003年秋田県北秋田郡森吉町から数えて20年ぶり。現在の形式になってからは宮城県において初めての開催であり、大会運営に携わったメンバーの多くがARDF競技の未経験者という状況から、大会運営には不慣れなところが多々あったと思われませんが、大会参加選手やARDF委員の皆さまの暖かいご支援により、大会開催を乗り切りことができ、大会スタッフ一同感謝しております。また、今大会の競技コースは競技経験が浅い方々にとって経験的にも体力的にも厳しいコースではありましたが、競技における駆け引きが十分堪能でき、学生さんたちからも「楽しかった」と感想をいただき、主催者側としても開催した甲斐がありました。



最後になりますが、私どもへ親身になってのご指導・ご教示いただいた全国のOM諸氏、遠路遙々ご参加いただいた選手や付き添いなど、皆さま方へこの場をお借りして心から感謝申し上げます。

▽開催のまよう・結果(ARDF2023 HP)

<https://www.jarl.com/tohoku/ARDF2023/ARDFtop.html>

(レポート：2023全日本ARDF競技大会実行委員会
JH7DHG 志賀大吉)